

8	愛知	豊明市立沓掛中学校	ナス ユウタ		
			名前	那 須 雄 太	
分科会番号		1	分科会名		国語教育（文学その他）

研究題目 学びを視覚化することで、自分の技能として蓄積する生徒の育成
～ＩＣＴ機器を用いた学びノート作りを通して～

1 主題設定の理由

(1) 主題設定

令和2年4月から全面実施された学習指導要領では、予測困難な社会を生き抜くために、主体的・対話的で深い学びを実現し、言語活動を通して国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成することが求められている。国語科においては、言葉による見方・考え方を働かせ、言葉の特徴や使い方を理解し、自分の考えを形成するとともに、他者と共有しながら思考を深めることが重視されている。また、学習した知識や技能を各単元で完結させるのではなく、他の単元（もしくは教科）や日常生活へと生かしていくことのできる「生きて働く知識・技能」として定着させることが重要である。

しかし、日々の授業では、読解の技法や文章を読む際の着眼点を学んでも、単元が終わると学習内容が十分に蓄積されず、次の単元では再び一から考え始めてしまう生徒が少なくない。また、「前に学んだことを覚えていない」「どのように考えればよいか分からない」といった様子も見られ、学びが連続しておらず、技能として十分に定着していないことが課題である。そのため、自分が身に付けた読解の方法を整理し、必要な場面で活用できるようにする手だてが必要であると考えた。

さらに、本学級の生徒は、一つ一つの授業には意欲的に取り組むものの、自分ができるようになったことや学びの積み重ねを実感できていない生徒も多い。学習内容を振り返る場面では、「何を学んだかは覚えているが、次にどう生かせばよいか分からない」「以前学習した内容を見返す機会が少ない」といった声も聞かれた。学習への意欲を持続させるためには、自分の成長を可視化し、積み重ねを実感できるようにすることが重要であると考えた。

そこで本研究では、ＩＣＴ機器を活用し、「コラボノート」を用いて単元ごとに学んだ読解の技法や考え方を「学習の切り札」としてまとめる「切り札ノート」を作る実践を行う。心情曲線や要約の方法、人物相互の関係の捉え方など、その単元で学んだ読解の視点を自分の言葉で整理・蓄積し、必要に応じていつでも見返すことのできるノートを作成することで、学びを視覚化していく。また、実際の読解活動で「切り札ノート」を活用するたびに内容を見直し、使いやすさや改善点、新たに気付いたことを書き加えることで、自分だけの読解の手引きとして継続的にブラッシュアップしていく。

このような取り組みを継続することで、生徒は学習した読解の技法を知識として蓄積するだけでなく、自ら活用できる技能として定着させることができると考える。また、自分の成長を視覚的に確認しながら学習を進めることで、読解の際の思考を整理し、主体的に学習へ取り組もうとする態度の育成にもつながると考え、本主題を設定した。

(2) 研究仮説

単元ごとに学んだ読解の技法や考え方を、ICT 機器を用いて整理・蓄積し、それを読解活動の中で繰り返し活用・改善することで、読解する際の思考を整理しながら技能を定着させるとともに、自ら学びに向かう態度を育成することができるだろう。また、読解の技法を知識として蓄積するだけでなく、自ら活用できる技能として定着させることができるだろう。

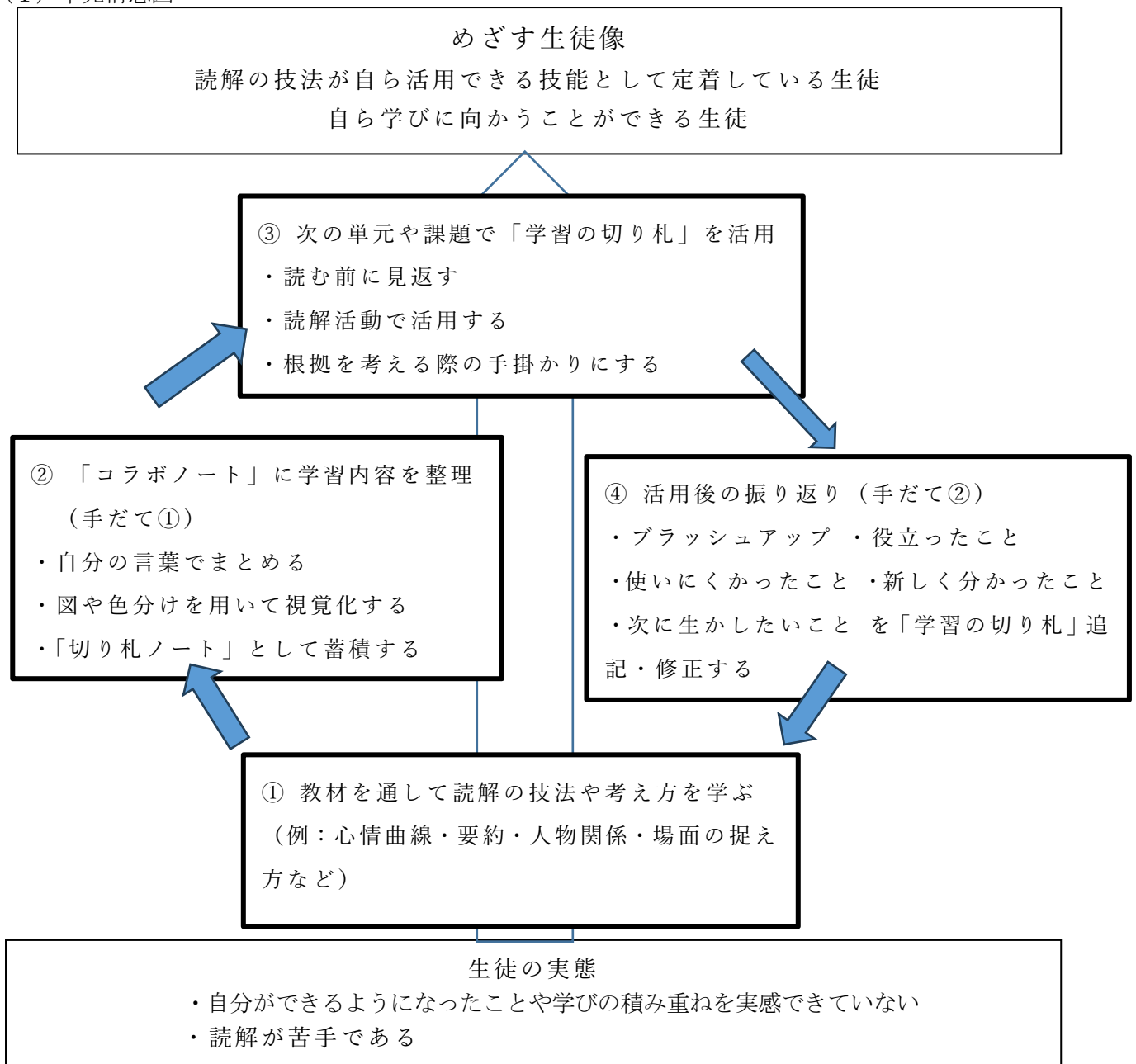
2 何で

(1) 対象生徒 中学校第1学年33名

(2) 対象教材 『はじまりの風』『ダイコンは大きな根?』『ちょっと立ち止まって』
『比喻で広がる言葉の世界』

3 何をどのように

(1) 単元構想図



(2) 抽出生徒と目指す生徒像

	生徒の様子	めざす生徒像
A	・国語の読解に対する苦手意識がある。	読解に対する苦手意識を克服し、主体的に授業に取り組むことができる生徒

4 研究の実態

(1) 『はじまりの風』『ダイコンは大きな根?』

手だて① 「コラボノート」に学習内容を整理する。

『はじまりの風』では、登場人物の心情の変化を読み取るための読解の技法として、「心情曲線」を取り上げた。心情曲線は、登場人物が「どの場面」で、「何をきっかけ」に、「どのような変化」をしたのかを考えながら心情の動きをグラフで表し、その根拠となる本文中の叙述を併せて記録することで、心情の変化を視覚的に整理する手法である。また、「物語や小説を読むときに活用すること」「作品を一度読み終えた後、班で話し合いながら考えを深める場面で活用すること」



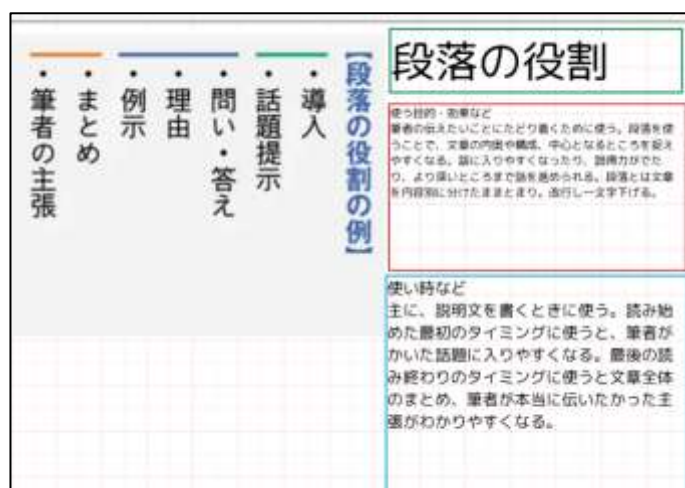
資料① 教師が示した例

を「使い時」として整理させた。「コラボノート」を用いて学習内容をまとめるのは初めての取り組みであったため、この單元では「学習の切り札」の見本を提示し、まとめ方やレイアウト、記載する内容を具体的に示した（資料①）。その結果、生徒は見本を参考にしながら、「心情曲線とは何か」「どのような場面で活用するのか」を一枚のノートに整理することができた。しかし、記述内容は教師の見本を基にしたものが多く、自分なりに内容を取捨選択したり、より使いやすい形に工夫したりする姿はまだ見られなかった。

続く『ダイコンは大きな根?』では、説明的文章を読む際の視点として「段落の役割」に着目した学習を行った。導入・問い・答え・例示・まとめといった段落の役割を整理し、それぞれが文章全体の構成や筆者の主張を支える働きをもつことを学習した。生徒Aは、「筆者の伝えたいことにたどり着くために使う」「段落の役割を考えることで文章の構成や中心となる内容が捉えやすくなる」「話題に入りやすくなったり、説得力のある文章の構成が分かったりする」といった目的や効果を、自分の言葉で「学習の切り札」にまとめていた。また、説明文を読むときは読み始めに段落の役割

を考えることで話題が捉えやすくなり、読み終わりには文章全体を整理して筆者の最も伝えたいことを理解しやすくなるなど、活用する場面についても具体的に記述する姿が見られた（資料②）。

二つの単元を通して、生徒Aは読解の技法や考え方を「学習の切り札」として蓄積することができた。特に、『ダイコンは大きな根？』では、教師の見本に頼るだけでなく、学習した内容を自分の言葉で整理したり、活用する目的や使う場面までまとめたりする姿が見られ、「コラボノート」の活用にも徐々に慣れてきたことがうかがえた。



資料② 生徒Aの「段落の役割」のページ

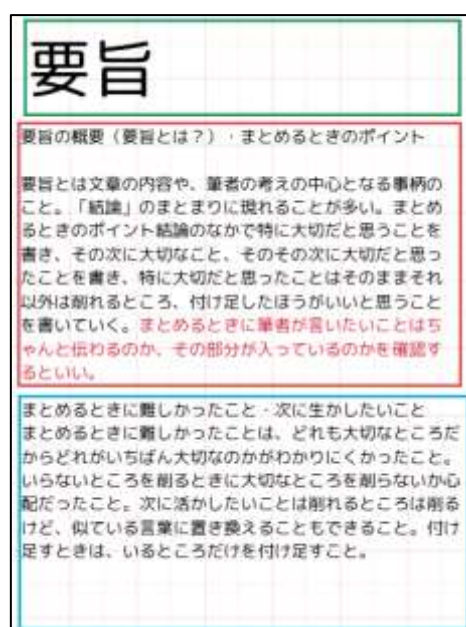
（2）『ちょっと立ち止まって』『比喻で広がる言葉の世界』

手だて② 活用後の振り返り

説明的文章『ちょっと立ち止まって』では、「要旨」のまとめ方について学習した。生徒Aは、要旨とは文章の内容や筆者の考えの中心となる事柄であり、文章の結論部分に表れることが多いということを「学習の切り札」に整理した。また、要旨をまとめる際には、結論の中から特に大切な内容を選び、それ以外の部分は削ったり、必要に応じて言葉を補ったりしながら簡潔にまとめることがポイントであることを、自分の言葉で記録していた。

さらに生徒Aは、「まとめるときに難しかったこと」として、どれも大切に見えてしまい、一番重要な内容を判断することが難しかったことや、不要な部分を削る際に、大切な内容まで削ってしまわないか不安だったということを取り返っていた。一方で、「次に生かしたいこと」として、削れるところは削るだけでなく、似た意味の言葉に置き換えて簡潔に表現することができるということや、必要な内容だけを補いながらまとめることを意識したいといった改善点を具体的に記述しており、自らの学習を振り返る姿が見られた。

その後、『比喻で広がる言葉の世界』の学習では、『ちょっと立ち止まって』で作成した「要旨」のページを見返しながら要旨をまとめる活動を行った。生徒Aは「切り札ノート」を活用し、自分でまとめ方を確認しながら学習を進めることができた。さらに、学習後には「まとめるときに、筆者が言



資料③ 生徒Aの「要旨」のページ（赤字が後で追記したもの）

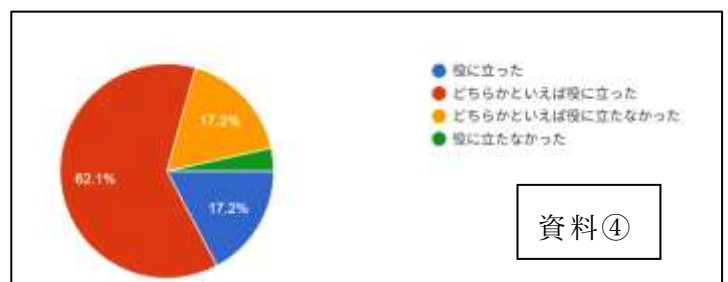
いたいことはちゃんと伝わるのか、その部分が入っているのかを確認するとよい」という新たな気づきを追記する姿が見られた（資料③）。

このことから、生徒Aは一度まとめた学習内容を実際の読解活動で活用し、新たな視点や改善点を付け加えることができるようになり始めていることが分かった。一方で、追記された内容は教師の発問や振り返りを基にしたものが中心であり、自ら必要性を判断して「切り札ノート」を更新する姿はまだ十分とは言えなかった。読解活動の中で継続的に「切り札ノート」を活用し、その都度内容を見直ししながら自分だけの読解の手引きへと発展させていくことが、技能の定着と主体的な学びにつながると感じた。

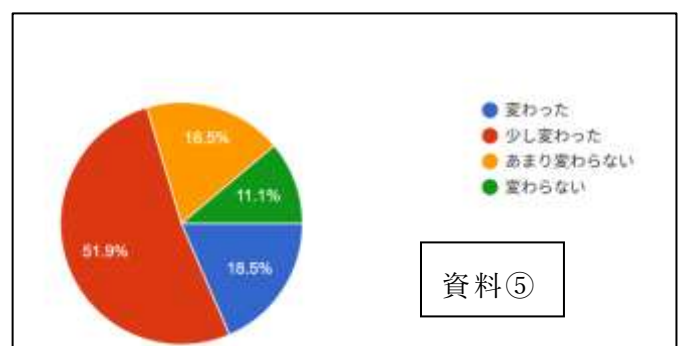
5 研究の成果と今後の課題

（１）事後の様子

資料④は『比喩で広がる言葉の世界』を学習した後に行ったアンケート結果である。『切り札ノート』にまとめた『要旨』は『比喩で広がる言葉の世界』の要旨を考える際に役に立ちましたか」という質問に対し、約 80%の生徒が「役に立った」と回答した。理由を見ると、



「要旨は、だいたい最後の段落にあるのは覚えていたけれど、どう要旨の文を作るのかや、何を付け足したり減らしたりするのが覚えていなかったから、そこで、切り札ノートでどのようにやるのかを見たから役に立った」や「分からなくなったときに 見直せて分かったし先生に聞かずに自分で書いた文だからすぐ意味が分かってよかった」など学習内容の蓄積により振り返ることができた体験や自分でまとめた内容だからこそ理解しやすかったことが書かれており、手だて①②の学習内容を整理し、それを活用して振り返る活動は一定以上の効果があると考えられる。また、『学習の切り札』をまとめることで自分の授業に対する気持ち・姿勢は変わりましたか」という質問に対し、約 70%の生徒が「変わった」と回答し、



「国語が少し楽になった」など国語に対する心理的ハードルが下がったと感じられる意見や「切り札ノートを書くためにしっかりと授業を受けようと思った」などの「学習の切り札」を作ること自体が授業の意欲向上につながっていると感じられる意見が見られた（資料⑤）。

（２）抽出生徒から見られる成果と課題

① 手だて①の成果と課題

・成果

- 学習内容を一つのページに視覚的にまとめることができた。

○ 「なぜ使うのか」「どのような効果があるのか」「いつ活用するとよいのか」といった視点を自分の言葉で記述する姿が見られた。

○ 自分が難しいと感じた点や次に意識したいことまで記録することができた。

以上のことから、生徒は読解の技法を知識として整理するだけでなく、自分の学習を振り返りながら理解を深めることができたと考えられる。

・課題

▲ まとめた内容は教科書に書いてある内容や教師の話した内容が多く、自分が実際に学習して感じ取った内容や次に生かせる経験の蓄積が少ない。

この課題は、最初の「学習の切り札」よりも最新の「学習の切り札」の方がより上手にまとめてあった点を考えると、試行回数を重ねることによって徐々に改善されていくのではないかと考えられる。

② 手だて②の成果と課題

・成果

○ 「前回まとめた技法を使うと問題が解ける」「この切り札ノートでは実際に問題を解く際に分らないことがあった」などの学習の手ごたえから追記修正することで、より実践的な読解の技能を定着させることができた。

○ 読解の技法は断片的な知識ではなく、さまざまな技法を使いこなすことによって文章に対する理解がより深まることを実感することができた。

以上のことから、手だて②によって「知識としての技法」から「技能としての技法」に、より近づけることが出来たと考えられる。

・課題

▲ まとめた「切り札ノート」を使う経験が圧倒的に少なく、定着の実感が湧かない。

6 まとめ

実践の結果、生徒は学習内容を視覚的に整理し、自分の言葉でまとめることで、これまで連続していなかった学びを関連付けながら理解できるようになった。また、作成した「切り札ノート」を次の単元で活用することで、既習事項を生かして課題に取り組む姿が見られ、学びの蓄積が読解への自信や学習意欲の向上にもつながることが確認できた。

一方で、「学習の切り札」の内容は教師の支援や発問を基にまとめられる場面が多く、生徒自身が必要性を判断して内容を更新したり、学習経験を基に改善したりする姿は十分ではなかった。また、読解の技法を活用する機会が限られていたため、技能としての定着を実感できるまでには至らない生徒も見られた。知識を技能へと転化していくためには、継続的に活用する場面を設定するとともに、試行錯誤を通して自ら「学習の切り札」を改善していく学習過程を保障することが重要である。

今後は、単元を越えて「学習の切り札」を活用する場면을意図的に増やし、実践を積み重ねながら、主体的に学び続ける生徒の育成をめざして研究を深めていきたい。